

営農情報

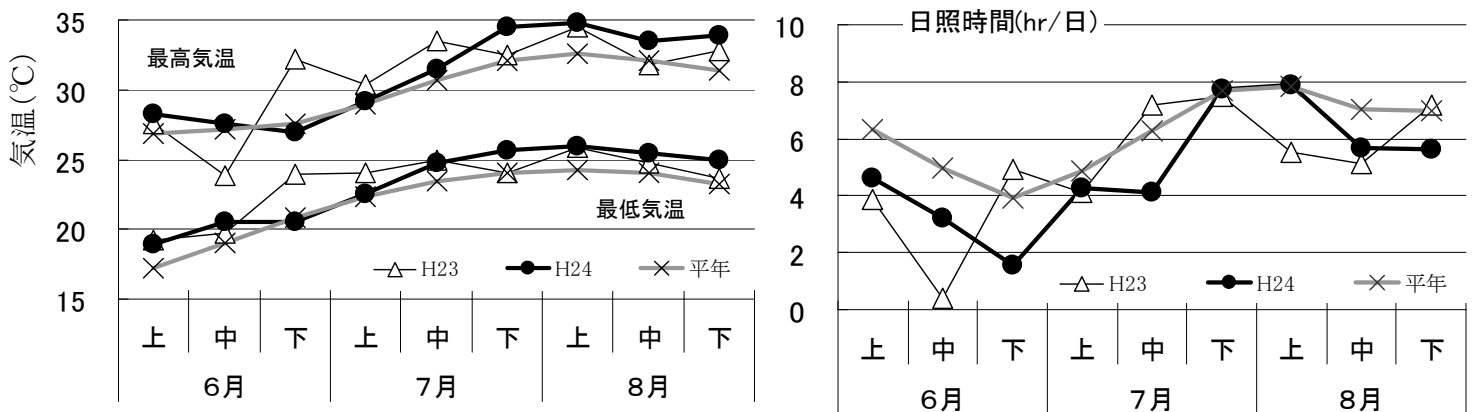
第4号 平成24年9月10日発行

「あまおう」9月の管理

福岡大城農業協同組合
南筑後普及指導センター

今年の苗は、梅雨時期の長雨で初期生育が悪かったため、例年に比べると根量が少なく、やや小ぶりでした。7月下旬以降、高温と多日照によって、苗の生育は急速に回復し、現在は中苗程度に仕上がってきているようです。根量が多くて生育が良いと体内窒素濃度の低下が早くなりますので、普通ポットは肥料が切れすぎないように管理して下さい。また、気象庁では9月も気温が高いと予想しています。花芽分化を促すためできるだけ寒冷紗などを被覆して気温を下げる対策を実施して下さい。

病害虫では、高温・乾燥傾向のためハダニやアブラムシの発生が多く、8月中旬以降は炭そ病も散見され始めています。病害虫を本ぼに持ち込まないように防除対策を実施して下さい。



〈 育苗期の最高・最低気温と日照時間 (アメダス久留米より) 〉

育苗管理(普通ポット)

- 高温が予想される場合は、花芽分化促進のため寒冷紗を被覆する。
- 肥料が切れている場合や、根張りが悪く(根傷み・根量不足)輪斑病の発生が多い場合は、葉面散布(メリット青500倍など)を2~3回行う。

定植

- 畝を作った後は定植までビニル被覆(べたかけ)をしておく。
- 早い作型ほど高温時の定植になるので、活着促進・根痛み防止のために、定植前に寒冷紗を張って、地温を下げる。

➤ 内なりの場合、条間は55cmを目安にし、狭くならないように注意する。

➤ 株間は、土耕栽培で25cm、高設栽培で 20～23cmを目安にする。

➤ 定植前には必ず花芽検鏡(1作型 3株/回)を行い、**最適な花芽分化ステージになってから定植**する。

➤ 夜冷や株冷の出庫予定日に花芽分化していない場合は、そのまま低温処理を続け、再度検鏡して花芽分化を確認してから定植する。

➤ 深植え(クラウン部を埋める)は、生育不良になりやすいため避ける。

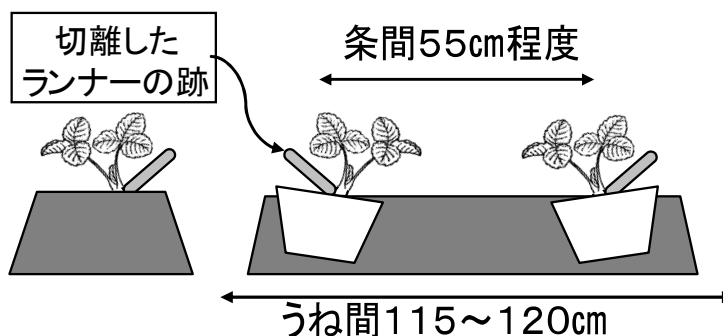
➤ 苗は、果梗の出る向きをそろえるため、果実を成らせた方向の反対側に、親株とつながっていたランナーを向けて定植する。

➤ 果梗は、クラウンの傾いた方向に伸びやすいので、苗を果実を成らせる方向にやや傾けて定植する。

➤ 疫病予防に「リドミル粒剤2」の作条土壌混和を行う。

〈 定植日と花芽分化程度を目安 〉

定植日	花芽分化程度
9月10～14日	分化～ガク片形成
9月15～18日	分化～ガク片形成
9月19～22日	分化
9月23日～	肥厚後期



定植後の管理

●寒冷紗による遮光

➤ 定植前に寒冷紗を被覆し、定植後は7～10日程度、活着する(早朝に心葉から溢液が出る)まで遮光しておく。

➤ 2番花房の花芽分化促進のために寒冷紗を利用する場合は、10月1日頃から 10月20日頃まで被覆する。

〈 寒冷紗の種類と遮光率 〉

種類	遮光率
シルバー寒冷紗 109 番	39%程度
黒寒冷紗 600 番	51%程度
黒寒冷紗 610 番	58%程度

※寒冷紗被覆時(2番花房の分化対策用)の注意点

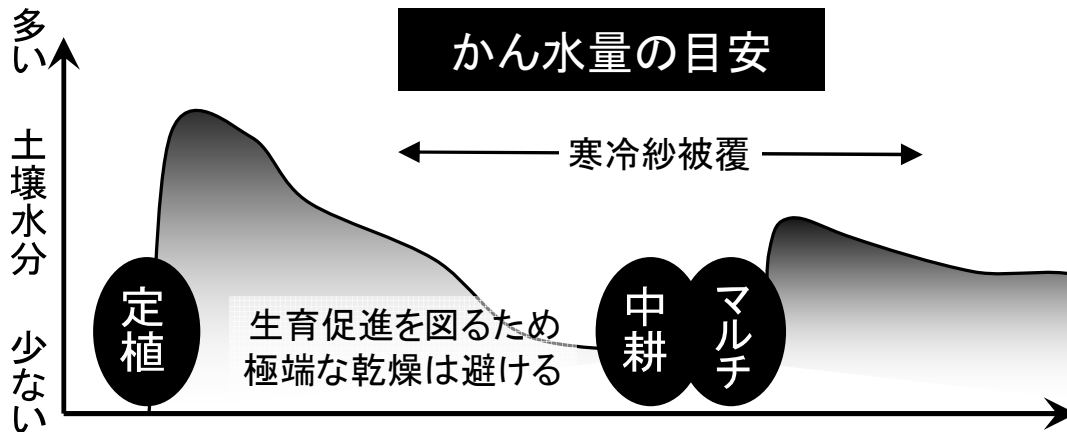
➤ 天候によっては軟弱徒長しやすいため、通気性を確保する。

➤ ほ場が乾きにくくなるため、かん水の回数や量を調整し、適湿を保つ。

➤ 軟弱な生育になるとうどんこ病の発生が多くなるため、予防防除を徹底する。

● かん水

- 定植直後は、活着まで畝の表面が乾燥しないように充分かん水を行う。
- かん水方法は、一次根の発生を促進するため、クラウン部が常に湿るように頭上からの散水を少量多回数で行う。
- 活着後は、ハウス内で作業が行えるように、かん水量をやや控える。
- 2番果房の分化安定のために寒冷紗を被覆した場合、ほ場が乾きにくくなるため、過湿にならないようなかん水管理を行う。



● 2番果房分化(10月中下旬)までの管理

- 2番花房の分化状況によって栽培管理が変わるため、花芽分化確認用の苗を定植し、花芽分化状況を確認する。
- 作型によって2番果房の連続性が異なる。各作型の安定出荷対策として、以下が考えられる。

◆ 早期作型の場合 (2番果房が遅れやすい)

- ・ 基肥量の削減や速効性肥料の使用抑制で活着後の肥効を抑える。
- ・ 寒冷紗被覆を行い、気温を下げて2番花房の花芽分化を促進させる。
- ・ 生育旺盛にならないよう注意してかん水を適宜行う。
- ・ 追肥は、2番花房の花芽分化を確認してから行う。
- ・ マルチ被覆後は、地温抑制のためマルチの裾を畝の肩まで上げておく。

◆ 普通ポットの場合 (2番果房が続きやすい)

- ・ 十分にかん水を行い、活着・初期生育促進を図る。
- ・ 活着不良などで生育が悪い場合、葉面散布の実施や早めのマルチ被覆などを行い生育促進に努める。

病害虫防除

病害虫の効率的な防除には、害虫は発生初期の防除、病気は発生前の予防防除が重要である。病害虫の発生状況に注意して防除を徹底します。なお、定植後の薬剤散布は、苗が活着してから始めます。

●炭そ病

- 発病した苗は育苗床から除去し、周辺の苗も罹病の可能性があるため出来るだけ使用しない（やむを得ず使用せざるえない場合は遅い作型にする）。
- 定期的な予防防除を徹底する。

●うどんこ病

- 軟弱徒長気味に生育すると発病・拡大しやすくなるため、定植後からビニル被覆まで定期的に予防防除を行う。（寒冷紗被覆した場合は要注意）

●アブラムシ

- ほ場周辺の雑草を除去する。
- 発生初期からの防除を徹底する。

薬剤例：コルト顆粒水和剤 3000～4000倍 3回 前日 ※ミツバチ3日影響
バリアード顆粒水和剤 2000～4000倍 3回 前日

●ハスモンヨトウ・オオタバコガ

- ハスモンヨトウは葉裏やハウスパイプ等に卵塊を産み付けるので、発見したら卵塊を除去する。
- オオタバコガは、新芽や蕾に、卵をひとつずつ産み付け、ふ化した幼虫が新芽や蕾、果実の中に潜るため、発見が遅れやすいので注意する。
- 両種とも、発生初期（1cm程度まで）の若齢幼虫時の防除が重要である。

薬剤例：プレバソンフロアブル5 2000倍 2回 前日
フェニックス顆粒水和剤 2000～4000倍 2回 前日

●ハダニ類

- 入庫前（定植前）は重要なハダニ防除適期である。しっかりと防除し、本ほへのハダニの持ち込みを防ぐ。
- 「チリカブリダニ」を使用する場合は、影響が長い農薬の使用を避ける。

薬剤例：マイトコーネフロアブル 1000倍 前日 2回 ※刊がリダニ：0日
コロマイト水和剤 2000倍 前日 2回 ※刊がリダニ：14日

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！